

「WHO 統合国際診断面接第5版(CIDI 5.0)日本語版の開発と信頼性・妥当性の検証
および活用のための体制整備に資する研究」

研究代表者 西 大輔（東京大学大学院医学系研究科精神保健学分野 教授）

研究要旨

本研究は、WHO 統合国際診断面接第5版(CIDI 5.0)の日本語版を開発し、その信頼性と妥当性を検討することが目的である。2021年度は、トレーニングパッケージを完成させ、ウェブシステムを改良し、患者群27例、地域住民100例のCIDI 5.0およびDSMチェックリストを用いた面接を実施した。また、プライマリケア医・心理師・保健師との連携の可能性についても検討を行った。来年度は患者群の調査を完了するとともに、患者群・地域住民群のデータ解析を実施する予定である。

研究協力者

川上憲人 東京大学大学院医学系研究科
精神保健学分野
下田陽樹 岩手医科大学衛生学公衆衛生
学
梅田麻希 兵庫県立大学
地域ケア開発研究所
片岡真由美 東京大学大学院医学系研究科
精神保健学分野
帯包エリカ 同上
安間尚徳 同上
佐々木那津 同上
飯田真子 同上
竹野肇同上
日高結衣 同上
澤田宇多子 東京大学大学院医学系研究科
精神看護学分野
北條理子 同上
岩永麻衣 同上
徳重誠 同上
大藪佑莉 同上
須藤美恵 同上
浅岡紘季 同上

A. 研究目的

WHO 統合国際診断面接(Composite International Diagnostic Interview, CIDI)は、WHOが開発、公表している現時点では唯一の、うつ病、不安障害などの比較的頻度の高い精神疾患の診断をつけるた

めの情報を包括的に収集できる精神保健疫学調査用の構造化面接である。精神障害の国際的診断基準がDSM-IVからDSM-5に、ICD-10からICD-11に変更されたことに伴い、CIDIは第5版(CIDI 5.0)に改訂された。CIDI 5.0を日本でも使用できるように整備することは、わが国の精神障害の疫学研究の基盤整備として、精神障害に関するさまざまな臨床研究で共通して診断、症状評価を行う上で、またDSM-5やICD-11による精神障害の診断を国内に広く普及する上で、きわめて有用と考えられる。

本研究は、CIDI 5.0の日本語版を開発し、その信頼性と妥当性をDSMチェックリストやICD診断との比較、および少数の精神疾患群と地域住民群との比較により検討することを目的とする。

B. 研究方法

1. トレーニングパッケージの完成、ウェブシステムの改良

面接員トレーニングパッケージを完成させ、それを活用した研修会を面接員対象に実施した。また、2020年度中に開発したCIDI 5.0の面接システムのベータ版(PC上で各設問が表示され回答を入力するとインターネット上のサーバーに回答が保存できるもので、対面の面接にも用いられるもの)の改良修正を行った。

2. 患者群における信頼性、妥当性の検討

精神疾患群に関しては、精神病性障害群、うつ病、双極性障害、不安症群、強迫性障害、心的外傷およびストレス因関連障害群、食行動障害および摂食障害群、アルコール使用障害について目標症例数を各疾患 20 人ずつとして、研究を実施した。

(倫理面への配慮)

人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針を遵守し、主機関・共同研究機関の倫理委員会の承認を得て行った。

3. 地域住民におけるフィージビリティ研究

性別、年齢を層別化した地域住民 100 人をリクルートし、CIDI 5.0 および精神科医・臨床心理士等による DSM チェックリスト・ICD チェックリストを用いた面接を実施した。

(倫理面への配慮)

人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針を遵守し、主機関の倫理委員会の承認を得て行った。

4. 精神保健に関する様々な専門家との連携に関する検討

上記 1 で述べた研修会にプライマリケア医・保健師・公認心理師等にも参加いただき、研修時間等に関してフィードバックを受けた。

C. 研究結果

1. トレーニングパッケージの完成、ウェブシステムの改良

トレーニングパッケージを完成させ、2021 年 6 月 7 日に面接員のための研修会を開催し、28 人が参加した。当日不参加だった面接員は当日の録画を視聴した。

また、ウェブシステムに関してはプログラムの文法エラーチェック、複数の精神保健の専門家や翻訳者によるシステムの動作

チェックを行い、入出力エラーや日本語訳の検討修正や質問全体の流れに間違いがないかを確認した。また、ボランティアによる模擬面接を行い、質問の意図が正確に理解されるかを調査した。いずれも問題のある箇所は検討修正した。

2. 患者群における信頼性、妥当性の検討
統合失調症 3 人、うつ病 4 人、パニック障害 2 人、強迫性障害 6 人、アルコール使用障害 1 人、摂食障害 11 人をリクルートした。

双極性障害と PTSD に関しては既存の共同研究機関では研究参加者の確保が困難と考えられたため、双極性障害については順天堂大学に、PTSD については国立精神・神経医療研究センターに研究参加者の確保をご依頼し、2 施設を共同研究機関に追加することに関して主機関（東京大学）の倫理審査で承認を得た。双極性障害については共同研究機関の倫理審査も終え、既に研究参加者のリクルートが開始された。

3. 地域住民におけるフィージビリティ研究

2021 年 7 月から 9 月に 48 人の地域住民に、また 2022 年 2 月から 3 月にかけて 52 人の地域住民を対象に CIDI 5.0 および DSM チェックリストを用いた面接を実施し、調査を完了した。(男性 51 人、女性 49 人、20 代 18 人、30 代 22 人、40 代 21 人、50 代 20 人、60 代 15 人、70 代 4 人)

4. 精神保健に関する様々な専門家との連携に関する検討

保健師・心理師・プライマリケア医との連携に関して、それぞれの専門家によって検討が行われた。

保健師との連携に関しては、地域における保健師の保健活動のみならず、保健師の

アセスメント技術の標準化やケアの質の向上にも資する可能性があると考えられた。一方で、回答のプロセスにおいて住民が過去のネガティブな体験をフラッシュバックした場合の対応方法について学ぶ必要性が示唆された。

心理師との連携に関しては、精神科医療を必要とする他領域での活用可能性や、医療領域のコメディカルとして協働する心理職の教育、さらには研究での活用可能性があると考えられた。一方、面接者・被面接者双方の負担の大きさについても指摘がなされた。

プライマリケア医との連携に関しては、プライマリケア医自身が CIDI を直接利用することは想定しにくいものの、心理師や看護師の補助、あるいは自記式の質問紙等に落とし込まれた場合には利用の可能性が生まれると思われると考えられた。

D. 考察

トレーニングパッケージの完成、ウェブシステムの改良、地域住民を対象とした研究、様々な専門家との連携に関する検討に関しては、当初計画通りに研究が進捗している。

患者群を対象とした研究に関しては、摂食障害と強迫性障害に関しては来年末までのリクルート完了が確実に見込める一方で、他の疾患に関しては研究参加者を確保する新たな対策を講じる必要があると考え

られ、来年度中にリクルートが完了するよう対策を講じている。

E. 結論

CIDI5.0 日本語版のトレーニングパッケージの完成、ウェブシステムの改良、地域住民を対象とした研究、様々な専門家との連携に関する検討を予定通りに実施した。患者群を対象とした研究に関しては、いくつかの疾患でリクルートが予定より遅れており、来年度中に予定通りリクルートが完了するよう対策を講じている。

F. 健康危険情報

なし。

G. 研究発表

1. 論文発表

なし。

2. 学会発表

なし。

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許取得

なし。

2. 実用新案登録

なし。

3. その他

なし。